

水の源

MIZU NO MINAMOTO

2022

50

Summer



巻頭 特別対談

「一旗揚げて田舎に帰ってくる」から
「田舎で一旗揚げる」へ

アフターコロナにおける新しい価値創造

明治大学農学部教授 小田切 徳美さん

ウォークルポ

グリーンツーリズムで“まちごと移住促進”

～コンパクトタウンの効果的な魅力の伝え方～

岐阜県白川町

特集

労働力不足解消の妙手

特定地域づくり事業

協同組合制度

奈良県川上村

水源の里のうまいもん

殿様プリン

広島県神石高原町

全国水源の里

フォトコンテスト

結果発表

アフターコロナにおける新しい価値創造

「一旗揚げて田舎に帰ってくる」から
「田舎で一旗あげる」へ

小田切徳美教授

対談

山崎善也会長

profile

1959年神奈川県生まれ。明治大学農学部教授、博士(農学)。東京大学農学部卒業、同大学大学院農学研究科単位取得退学。専門は農政学・農村政策論、農村ガバナンス論。
著書に『田園回帰がひらく未来:農山村再生の最前線』(岩波ブックレット)、『農村政策の変貌:その軌跡と新たな構想』(農文協)、『農山村は消滅しない』(岩波新書)など多数。

小田切徳美教授
(明治大学農学部)

地域の活性化は、
当事者意識をもつ人材を育て、
大事にすること

～綾部の水源の里の集落をいくつか視察していただきましたが、いかがでしたか？

小田切 いろいろ勉強になりました。たとえば「市野瀬」集落で紹介いただいた工忠照幸さん、この方はゲストハウスを営まれていて、かついろいろなお仕事、書き出していたら8つぐらいの仕事をされています。マルチワーカーというのは、じつは本業とのバランスをとるのが大変で成立させるのは意外と難しいのですが、収益を得るためにあれにもこれにも手をつけるというのではなく、「核があるものがあって一つひとつが全部つながっているから大丈夫です」というお話をうかがいました。

山崎 工忠さんは10～20代のとき日本を飛び出しヨーロッパやアジアほか世界各国で暮らし、帰国後は都会でホテルに勤められていました。その経験を生かし、これからはインバウンドや富裕層にとっても、「田舎」が魅力的なコンテンツになると考えられ、「おもしろいことを広げていきたい」と平成25年に1ターンで綾部に移り住んで来られたのです。単純に自然が好き、田舎暮らしに憧れてではなく、ユニークな視点をもっておられます。たしか今年は消防団の庶務部長も務められています。また今秋には2人目のお子さんも生まれるそうです。地域にも溶け込んでおられ、ありがたい人材です。

小田切 週に何回か地域紙(コミュニティ紙)を配達されているそうですが、これが高齢者の見守りにつ



ながっていますし、また旅行業としては、たとえば製材所でヒノキやサクラの端材を使用して2種類のぐい呑みをつくり、その「MYぐい呑み」を使って、現在は酒蔵見学と試飲ツアーといったプログラムをつくられています。これはその地に住んでいる人間だからこそ生まれるものでしょう。地域にしっかり根ざしながら、地域外とのつなぎ役にもなっておられます。

～小田切先生は御著書やセミナーなどで、地域づくりには「人づくり」、当事者意識をもった人材が必要であるとおっしゃっていますね。そして「関係人口」も大切であると。

小田切 以前、ある首長さんから「関係人口なんて、住民税を払うわけでもないので何の役にもたたん」と面罵されたことがあります。しかし、そうではなく、関係人口が増えることがその後の定住につながるというしっかりしたデータも取れています。ただ、コロナ禍でさまざまな分断・亀裂が生まれました。都市から来た人と住民、感染者と非感染者など、乗り越えなければならぬ大きな課題がありますね。

山崎 高齢者と現役世代(年金族と就労世代)の差もあります。年金族は経済が動かなくても収入は減らない。それならばリスクを取らないという判断になりがちです。一方、若手が動かないと経済は



ゲストハウス「クチュール」での視察の様子。小田切教授と工忠さん

農村政策の専門家として政府の各種審議会の委員も務められている明治大学の小田切徳美教授が京都府綾部市の水源の里を視察され、その後、全国水源の里連絡協議会会長の山崎善也綾部市長との対談が行われました。ここではその際に挙がった話題をいくつかピックアップして紹介します。



まわっていかない……。都市部と地方、地方でも年金族（綾部は4割）と現役世代では考え方が違ってきます。

小田切 そこで大きな役割を果たすのが、関係人口だと思います。年代もさまざまに都市と地域の橋渡しをするプレイヤーです。もちろん「ふるさと納税」だけの関わりの人がいれば、2地域居住の人もいます。多様性があれど地域間を結ぶプレイヤー。ポストコロナ期の日本社会に重要な役割だと思います。

綾部市はふるさと納税以前、平成11年から「あやべ特別市民制度」を導入されていますが、構想日本※1が提言し総務省がモデル事業として推進している「ふるさと住民票」※2なども、ポストコロナ社会の再生に向けての大きな灯火だと思います。

山崎 かつては第2の人生をのんびり暮らしたいという方が多かったけれど、コロナ禍以降、それだけではない新しい価値観をもった人が増えています。移り住んでくるもよし、2地域居住もよし、地方都市でそういう新しい価値創造ができるということをもっと発信していきたいですね。

小田切 いろいろな方が「ごちゃませ」になっていくのが地域の活性化につながっていくのだと思います。一方で、アメリカやオーストラリアには富裕層だけのコミュニティがあります。入り口にゲートを設けて他者を受け入れない世界、ある意味安心なのかもしれませんが、街としてのダイナミズ

ムが損なわれていくと思います。

日本でもコロナ禍でそういったゲーテッドコミュニティ化が進んでいかないと危惧しています。今ある仕事リモートでできるからと、地方に移っても交流がなければ「点」のままです。

山崎 そうですね。コロナ禍で学べたことも多いのですが、それでもこの2年間、たとえば地域のお祭りや行事ができなかったことはやっぱり厳しいですね。

小田切 本当にそうだと思います。ボディブローのように後から効いてくる…。

山崎 継続していたものをやめるのは簡単です。しかし、復活させるのは難しい。いったん途絶えたことで「もうやらなくてもいいか」という易き方向に流れがちです。中止が度重なると、「続けよう」、「復活させよう」という意欲が薄まっていきます。

小田切 いまが正念場だと思っています。3年連続中止となれば状況はもっと厳しくなる。もちろん、そのときどきの様子をしっかりと見極める必要はありますが、つながりを継続するためにも工夫をして、地域行事や祭事を行ってほしいと提言しています。

学校は地域の砦 学校魅力化が ふるさと教育につながる

～当事者意識をもつ人材づくり、そのために「公民館の活性化」と「高校魅力化」を小田切先生はキーワードに挙げられています。

小田切 社会教育法ができるまでは、「公民館」で政治活動などが当たり前に行われていました。それが「教育施設」になって、「集会はだめ」、「経済活動はだめ」というように制約が増えて活気を失っているところが多いのですが、地域の誇りをつくるための公民館活動などを活発にし、ここを再活用する。限界はあるけれど可能性があると思います。

山崎 綾部は公民館活動に熱心で、毎年表彰を受けています。俳句教室や綾部百人一首かるた会を開催するなど、様々な工夫をされている姿に頭が下がる思いです。

小田切 公民館活動では3世代がごちゃませになります。産業系はボスが長く務めるため、世代交代が起きにくい。公民館はおじいちゃんとかどもがフ

ラットで、まさにごちゃませで世代交代が起きます。公民館活動の隠れた効果ですね。

高校魅力化について言えば、島根県の海士町のように地域の特性を前面に打ち出して国内留学生を集めて活性化しているところもあります。高校魅力化についてはいろいろな考え方や手法がありますが、高校魅力化に取り組んでいる地域とそうでない地域の明確な差は、前者のほうが「将来、ふるさとに帰ってきたいと思う」比率が高いということです。そして、「自分の親以外に、相談できる相手が身近にいる」という声も多いのです。学校を見直すということはその地域を見直すということにもつながります。

地方生活、田舎暮らしをするなかで、ネックとなっていたのが教育、医療、公共交通の問題だと思いますが、IoTやデジタル技術の発展で、たとえば高度医療が遠隔操作でできるようになったり、クルマも自動運転になったり、学校関係の講義のリモートが進んだりすることで、次代や次々代にはさらに新しいもの、新しい価値観が生まれているのでしょう。

でも結局、行き着くところは人だと思います。

山崎 これまでは、「都会で一旗揚げて田舎に帰ってくる」だったのが、「田舎で一旗揚げる」ということにつながります。その受け皿をしっかりと用意していかないといけません。 【構成・蒲田正樹】

※1 1997年に元大蔵省職員の加藤秀樹によって設立された日本の政策シンクタンク

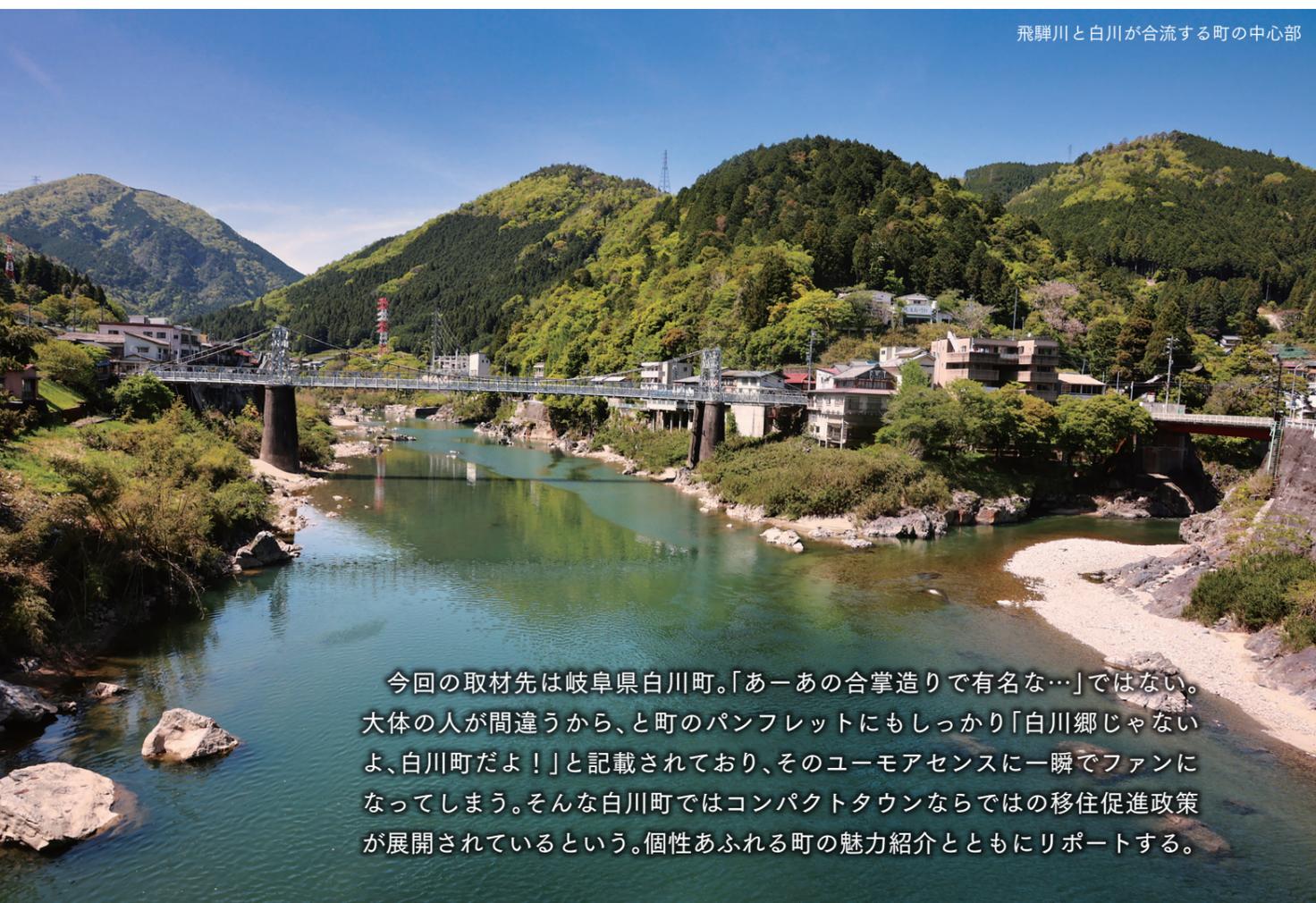
※2 仕事などで居住地を時々変える必要がある人や、ふるさとに強い愛着をもちながらも離れた都市で暮らす人などを意識して、住民と自治体を従来の「単線」から「複線的な関係（柔軟な関係）に変えることを目的として「ふるさと住民票」などが提言されている



グリーンツーリズムで “まちごと移住促進” ～コンパクトタウンの効果的な 魅力の伝え方～



岐阜県白川町



飛騨川と白川が合流する町の中心部

今回の取材先は岐阜県白川町。「あーあの合掌造りで有名な…」ではない。大体の人が間違ふから、と町のパンフレットにもしっかり「白川郷じゃないよ、白川町だよ！」と記載されており、そのユーモアセンスに一瞬でファンになってしまう。そんな白川町ではコンパクトタウンならではの移住促進政策が展開されているという。個性あふれる町の魅力紹介とともにレポートする。

役場でバランスボール

新緑の若葉萌え、田植えを待つ水田を渡る薫風が心地よい4月の終わり、その町を訪れた。前日までの長雨が嘘のような好天に恵まれ、車窓から眺める町は、切り立った山々の谷あいを通る飛騨川に

キラキラと光が差して美しく輝く。良い出会いに恵まれそうな予感がする。

待ち合わせの白川町役場で迎えてくださったのは、総務課長の安江章さんと企画課長の長尾弘巳さん。今回アテンドいただくお二人のもとへ辿り着くまでに、カラフ

ルなバランスボールに座った職員

さんを何人か見かけた。聞けば、今年の4月中旬から職員の健康増進を目的に、希望者の椅子をバラ

バランスボールに座って執務にあたる白川町役場職員



古民家を改修した白川町移住交流サポートセンター



簡易宿泊所も兼ねたサポートセンター内には、コワーキングスペースも完備

ンスボールに替える取り組みを試ししているという。それにより運動不足を解消し、デスクワークによる肩こりや腰痛の改善も期待できるそうで、今後の職員健診により効果検証を行うとのこと。より良い行政サービスを恒常的に提供するにはまず職員の健康から。高い意識と柔軟な発想から生まれる取り組みに、仕事の効率も上がるかも!?と感じる光景だった。

移住施策に特化の法人設立

まず案内していただいたのは、(一社)白川町移住交流サポートセンター。白川町では、空き家の相談や案内をはじめとする移住・定住などの窓口として2019年に同センターを設立。それまで役場が担ってきた業務のさらなる充実を図るため、空き家を改修して事務所を構え独立組織として法人化した。

センター長の鈴木寿一さんは「行政が業務を行うと小回りが利かない。土日や時間外の案内など、移住希望者により細やかな対応を行うため法人化しました」と話す。鈴木さんは役場のOB。行政事情も十分把握している。



センター長の鈴木寿一さん

センターは、集落支援員を含む常勤3人、地域おこし協力隊1人、週3勤務のパート職員1人の計5人体制で運営。その他、林業関係に従事する地域おこし協力隊2人も、雨天時はこちらが勤務地となる。主な業務として、空き家バンクの管理・運営、移住相談、物件案内など一般的な移住に関する業務のほか、昨年からは事務所にコワーキングスペースを整備してWi-Fi環境を整え、コロナ禍で飛躍的な需要をみせるワーケーションの誘致などにも取り組んでいる。

加えて今年からは、民泊もできるよう簡易宿泊所の許可を取得。徐々にPR活動と改善を重ね、来年3月までの本格稼働を目指している。「238kmという広い町域に空き家が点在しており、1日に何か所も回れない。ぜひ1泊以上は泊ってもらって、空き家巡りと併せてゆったり町の魅力を感じてもらいたいです」と話す鈴木さん。単なる業務を超えた町への愛着とホスピタリティがひしひしと伝わってくる。

空き家の掘り起こしが課題

今直面している課題は?と尋ねると、移住希望者の空き家需要に対して物件の供給が追い付いていないことだという。町内には500戸以上の空き家が確認されているものの、空き家バンクへの登録は約60戸と1割程度にしか及ばない。

そこでセンターでは、空き家の掘り起こし、バンクへの登録推進に力を入れている。

空き家が登録されない理由には、壊れていて住めない、残置物がある、仏様がある、たまに帰る、などが挙げられる。それらを解消して登録につなげたいとの思いから、センター職員が空き家の残置物の片づけをしたり、月に1~2回建物の風通しをしたり、家の周囲の草を刈ったりといった作業を行っている。管理する余力のない持ち主の手伝いを買って出ることによって、いずれ空き家バンクへ登録する気持ちになってもらい、そうなった時により良い状態で物件の受け渡しができる、といった好循環をつくりたいという。

また移住者には有機農業を希望する人が多いため、空き家とセットにできる農地の確保も欠かせないという。町内に19棟ある農園付き貸しコテージが人気で、すでに18棟は入居者で埋まっている。耕作放棄地問題などを抱える一方で、移住者に提供できる条件の良



空き家案内の様子



「晴耕雨読とみだ」は最大8人の宿泊が可能

白川町グリーンツーリズム協議会事務局の塩月祥子さん

おすすめのバレルサウナ体験



白川茶の茶畑。標高の高い山あいであつ茶葉は味わいと香りに定評があり、日本有数の銘柄茶として知られている



町民会館グロリアホルのパイプオルガン。「パイプオルガンのまち」として知られる白川町民にとっては、身近な楽器として親しまれている

い農地の確保はなかなか難しいと伺い、田舎事情の複雑さを感じた。そんな背景から、空き家も農地もまずは持ち主との信頼関係づくりからスタートしているのだ。

イチオシはサウナ体験

続いて訪れたのは、白川町グリーンツーリズム協議会事務局の「晴耕雨読とみだ」。同協議会は、白川町の特徴ある面白いコトやヒトを体験・交流ツアーを通じて知ってもらいたいと2020年に発足。前述のサポートセンターと連携を図りながら、地域の資源を活かした体験型ツアーで交流・関係人口を増やし、移住につながるファンづくりに努めている。

お話を伺ったのは事務局の塩月祥子さん。ご自身も15年前に名古屋から白川町に移住してきたという。「長男の食物アレルギーをきっかけに、生き方を見直したいという思いに駆られ田舎暮らしを決意しました。今は憧れのストロベリーハウス(葺の家)に住み、白川町の素晴らしさを皆に伝える仕事をしています」と話す塩月さん。

協議会の発足を機に、これまで町内の事業者が各々行っていた体験をツアーコンテンツとして体系化。新たなメニュー開発なども行い、現在では16もの多彩な体験プ

ログラムが用意されている。塩月さんは、とみだでゲストハウスの運営を行いながら、協議会の情報発信や体験ツアーの斡旋などの業務を行っている。コロナ禍の下でのスタートとなったが、地道な情報発信がメディアに取り上げられるなどし、徐々に客足は伸びてきているそうだ。

塩月さんイチオシの体験はサウナ。屋外で楽しむテントサウナやバレルサウナ(樽型の常設サウナ)で、里山の風景を五感で感じながらアロマでリラックスする。室内サウナとは全く違う開放感の中、極上のヒーリング体験ができるという。「現在、地元の間伐材を使ったバレルサウナの開発も進んでいます。ゆくゆくは町内の色んなところに設置して、ここでしかできないサウナ体験を多くの人に知ってもらいたい」と目を輝かせる。今後は、グリーンツーリズムを始めて町内に8軒となった農家民宿と連携を取りながら、滞在型ツアーを充実させ、宿泊者の増加を目指していく。

「地元の方は皆さん謙虚なので、外から来た私たちが思いっきり白川の良さをPRするんです!」と力説する塩月さん。ここを選んで来た彼女の言葉には紛れもない説得力がある。

町内サイクルで移住を促進

その後は、名産「美濃白川茶」の茶畑や地歌舞伎が行われる農村舞台「東座」、アウトドアリゾート「クオーレふれあいの里」、世界的オルガン建造家・辻宏ゆかりの工房やパイプオルガンの現物などを見学させていただき、お昼には道の駅ピアチェーレで郷土料理「けいちゃん」※1を食した。歴史・文化・自然・食…いずれをとっても実に奥が深い、魅力的な町だ。案内のお二人のおかげで、短時間で町のポイントに触れることができた。

この4月からは2020年6月に施行された「特定地域づくり事業推進法」に基づく「白川ワークドット協同組合」を発足させた。この事業は、繁忙期が異なる仕事を組み合わせることで年間通じて働ける職場を創出する取り組みで、組合の設立は岐阜県では第1号。移住者や地元での就職を志す若者にとって安定した働き口が得やすくなるため、定住に結びつくことが期待され、町の活性化につながりそうだ。この町には新たな試みにいち早くチャレンジする風土もある。

サポートセンターの鈴木さんは「ここ2年のグリーンツーリズムの取り組みで“体験する→泊まる→

食べる”という3つからなるサイクルができあがってきた。これを軌道にのせて町に多くの人を呼び込みたい」と抱負を語っていた。この仕組みは、イタリアの「アルベルゴ・ディフーズ」※2の概念にも通じる、まさに“まちごと移住促進”。

奇しくも白川町は1984年に辻宏さんがオルガン修繕に携わった経緯から、現在はイタリアのピストイア市と姉妹都市なのだとか。小さな町から大きな学びを得た取材となった。 【文・白波瀬聡美】

※1 岐阜の郷土料理である鶏肉料理。けい(鶏)ちゃん。鶏肉と野菜で手軽に調理でき、保存もきく家庭料理として岐阜県の飛騨地方で古くから親しまれている。



※2 イタリア語で「分散したホテル」という意味。町の中に点在している空き家をひとつの宿として活用し、町をまるごと活性化しようという取り組み。



明治22年に建てられた農村舞台「東座」。名誉館主は六代目中村勘九郎



キャンプやバーベキュー、川遊びなどのアウトドアが楽しめる「クオーレふれあいの里」



姉妹都市のイタリア・ピストイア市にちなみだカリヨンベルが目印の「道の駅ピアチェーレ」。特産品やお土産がそろう

白川町はこんなまち



岐阜県の中南部美濃地方の加茂郡東部に位置し、同県西北部・飛騨地方にあって「白川郷」で知られる大野郡白川村とは異なり、名古屋から車でおよそ1時間半で到着する距離にある。名前のとおり美しい川に恵まれた町で、飛騨川に注ぐ佐見川、白川、赤川、黒川が扇状に伸び、その流域に集落が点在している。町域は238km²。総面積の88%が森林と緑も豊かで、東濃ヒノキや冷涼な気候を活かした白川茶、夏秋トマトが主な特産品。近年では移住ドラマ『岐阜にイジュー!』や映画『his』の撮影地としても知られるようになった。

労働力不足解消の妙手

特定地域づくり事業 協同組合制度

奈良県吉野郡
川上村

新型コロナウイルスが引き起こした世界的なパンデミック。その影響で、従来の“当たり前”が当たり前でない、新しい社会風土が生まれ始めている。リモートやテレワークによる仕事のスタイルの変化により、高度成長期から転入超過が続いてきた東京の人口が転出超過に転じた。コロナは人々の営みを良くも悪くも力づくで根底から覆してしまった。国はこれらの社会変化に対応して新たに「特定地域づくり事業協同組合制度」を立ち上げた。労働力不足に悩む中山間地域の企業活動を支援しつつ、移住者に働く場を確保する、一石二鳥の施策だ。まだ全国でも実践例の少ない中、奈良県吉野郡川上村での取り組みを取材し、その可能性を検証する。

地方創生の起爆剤

国は、地方創生や東京一極集中の是正策として本協同組合制度を令和2年6月に創設した。人口減少や過疎・高齢化の進行により、中山間地域で企業活動を行う事業所は総じて労働力が不足、事業継続上の課題となっている。

そこで、労働力を確保したいという共通の課題を持つ事業者らが出資を募り協同組合を設立。組合が雇用する人材（ワーカー）を、出資により組合員となった事業者に派遣することで、事業者は安定的な雇用を確保できる。また、田舎暮らしを目的に移住・定住してきた新規住民をワーカーに採用することもできる。事業者にとっても新規定住者にとってもメリットのある“ウィン・ウィン”の政策だ。

本来、派遣事業は厳格な審査や手続きを経なければ認可されない

のだが、この協同組合は、人口規模や密度、事業所数などを勘案し、支援が必要と知事が判断すれば、労働者派遣法に基づく労働者派遣事業が届出だけで実施できるという画期的な制度となっている。令和2年度には島根県隠岐郡海士町、同浜田市、秋田県雄勝郡東成瀬村、北海道川上郡下川町、そして川上村の5組合が発足。令和3年度にはさらに38の組合が全国で設立され、地方創生の起爆剤として期待が高まっている。

労働力不足を一挙解決

中山間集落で事業活動を行う企業にとって最大の課題は、人手不足。背景には、過疎・高齢化の影響で労働力となる人材が枯渇していること。さらに、繁忙期と閑散期の差が大きく年間を通じた作業量が確保できないことが挙げられる。経営体質の脆弱性などのコスト面から通年で雇用することができな

いのだ。ピーク時は「猫の手も借りたい」といった労働力不足に陥る反面、閑散期には従事してもらう仕事を探すのに一苦労。

また、経営の将来展望が示せないことや、経営者の高齢化で事業の後継者が確保できないなど、地方の中小零細企業には様々な課題がある。そこで協同組合制により、1事業所では吸収できない労働力をピークタイムが異なる複数の事業所が共有することで、平準的な雇用機会を創出し、組合が雇用するワーカーを事業所の希望に基づいて派遣するというもの。現在で全国43もの地域で協同組合が組織されている背景には、地方の企業が抱える課題が大きいことがある。

また、新型コロナウイルスの感染拡大を背景に、テレワークやリモートの進展とも相まって、今後、地方定住も一層進むことが予想される。地方への移住者にとって住



川上村に美しく雄大にそびえ立つ大滝ダム



村で所有している、吉野川源流「水源地の森」



山深い場所に位置する川上村の集落

居の確保と同様に大きなハードルとなるのが、職の確保。移住後に協同組合に加入することで当面の生活資金が担保でき、地方移住を後押しする効果も期待できる。

組合の設立の手順は、同組合が知事に設立を申請。人口規模・密度や事業所の数などを勘案して人材確保に支援が必要な地域と知事が認定。これを経て、労働者派遣法に基づき事業の届け出をすることで派遣組合を設立することができる。組合は事業者にワーカーを派遣する際に発生する利用料（時間単価）を設定。年間の利用料金の総計に対して国が2分の1、自治体が4分の1を負担（自治体負担分の2分の1は特別交付税措置）して、事業の継続性と安定経営をサポートする仕組みだ。

先進地に学ぶ

令和2年度に組合を設立した3つの事例を下記の表で紹介する。それぞれの地域事情があり、組合の

設立背景や派遣先事業所の業種など、画一的ではないものの、今後、組合設立を検討する自治体においては参考となる部分も多いと思われる。

| 自治体 内容 | 島根県海士町 | 秋田県東成瀬村 | 奈良県川上村 |
|-----------|---------------|---------------------|-------------------|
| 組合名 | 海士町 復業協同組合 | 東成瀬村地域づくり 事業協同組合 | 事業協同組合 かわかみワーク |
| 自治体人口 | 2,200人 | 2,453人 | 1,316人 |
| 設立年月日 | 2020.11.9 | 2020.11.12 | 2021.1.26 |
| 認定年月日 | 2020.12.4 | 2020.12.17 | 2021.2.26 |
| 組合員数 | 5事業者 | 13事業者 | 7事業者 |
| 事業分野 | 食品加工・宿泊ほか | 農林・食品加工ほか | 移動販売・林業ほか |
| 出資金 | 5万円（一口1万円） | 150万円（一口1万円） | 7万円（一口1万円） |
| 派遣労働者 | 6人 | 3人 | 3人 |
| 利用料金 | 1,166～1,508円 | 792円 | 850～1,500円 |
| 賃金体系 | 労使協定方式 | 労使協定方式 | 労使協定方式 |
| 事務局体制 | 1人 | 2人 | 3人 |

※R3.4総務省資料より

川上村はこんな場所

川上村は西側に大峰山脈、東側に台高山脈が連なる紀ノ川の源流に位置する面積269平方km、人口1,156人※の村。1960年代までは約8000人の人口で推移していたが、高度経済成長や村内に2つある大迫ダムと大滝ダムの建設による集団移転などの影響を受け、以降は年々減少傾向が続く。村の中心産業は、吉野杉に代表される林業と、源流を保全し地域資源を活用する「かわかみ源流ツーリズム」を中心とした観光業。農地はほとんど皆無ともいえる状況で自家消費用の小規模栽培が行なわれる程度。交通アクセスは近鉄電車とバスを乗り継いで大阪・阿倍野から約1時間40分。車なら西名阪自動車道郡山ICから国道165号を橿原方面へ。橿原で国道169号に乗り換え約1時間。漫才師の西川のりおさんの出身地でもある。

※2020年国勢調査数値



派遣人材を受け入れている「一般社団法人かわかみらいふ」で事務局長を務める三宅正記さん(44歳)とかわかみワーク(協同組合)から派遣されている松井幸一さん(27歳)にお話を伺った。

■三宅正記さん (村民の暮らしを支える)

最初に役場から、組合を作って従業員を募集し、かわかみらいふにも派遣していくという話がありました。人手不足が課題だった弊社にとって救いの手。すぐに組合に参加しました。派遣人材には移動スーパーの運転・販売員として勤務してもらっています。村内にはスーパーがないため日用品を買うには車で30分以上かかります。そこで、曜日を決めて週1回、村内の集落ごとに移動販売事業を展開しています。コープの受託事業を合

め1集落に週2回訪問します。

また、単に物品販売するだけでなく、看護師さんにも同行してもらい安否確認や健康チェックも実施。お困り事サポートの色彩が強い活動です。利用者の評判は上々。山間地に集落が点在する立地条件から、移動スーパーが来るときしか他人との会話の機会がない人も多いんです。

取り扱っている商品は生鮮食品やカップ麺、ティッシュペーパーなど日常生活に必要な物品全般です。毎朝、スーパーで商品を積み込み、それから各地域を回ります。購入者の顔が見えるので、例えば今日A地区を回るとすると必ず納豆を買うおじいさんがいるのでいつもより多めに積み込むとか。そういう顧客ニーズを販売員が察知してサービス向上を図っています。

手数料はスーパーと販売代行の契約により支払われます。移動スーパーの年間売上は4,000万円程度。客単価は2,500円/回と店頭販売より圧倒的に高くなって

ます。顧客の期待感の表れです。ただ、移動販売事業だけで収支を考えると、運営は厳しいです。村民サービスの一環ということで村の支援を受けて何とか成り立っているのが現状です。

■松井幸一さん (働きながら適正を探る)

この仕事には令和3年の8月からかわかみワークからの派遣で働いています。村で生活し、働くことが目標だったのでUターンしてきました。前の職場が自分には合わなくて、Uターンして実家にいるときにかわかみワークから声をかけていただきました。

まず、相談に行き、どんな会社が登録しているのか?どんな内容の仕事があるか?とか、自分が就きたい仕事をもとに質問を投げかけました。らいふの仕事に興味があったので、できればらいふを希望したいと伝えました。いわゆるマッチングでかわかみらいふを受けてみようと思ったんです。面接はワークで行い、採用となった上で、らいふに派遣先が決まったという流れです。

現在、週5日間(月~金曜日)移動販売の仕事を担当させてもらっ



移動スーパーで住民の方々とお話ししている松井さん

います。村内の道路は狭く、最初は大きなトラックで集落回することに多少の不安を感じましたが、今では慣れました。自分で選んだ商品に対して、村の人々から「おいしかった」、「季節感を感じられた」などの評価をいただくと、やってよかったと思います。もちろんお客様からのオーダーにも応えます。「肉が食べたい」とか「刺身を持ってきて」とか。商品を積める量に限界があるので、電話で注文を受けることもあります。移動販売車は、自分のお店。品揃えが消費者のニーズにマッチして売れることがうれしいです。

日々、商品の目利きが試される緊張感もあります。派遣で働きながら、この仕事が自分に合っているか?適性を確かめることができるこの制度は、私のようなUターン者

川上村の特定地域づくり事業を担う「事業協同組合かわかみワーク」の設立時から運営に携わっておられる同村くらし定住課長の辰巳さん、かわかみワークのスタッフ奥田さん、加藤理恵さんに、設立の経緯や組合運営上の課題と成果について伺った。

にとっては良かったと思います。

村長の英断で組合設立

川上村では「川上ing作戦」という移住定住の施策を平成25年から始めています。この作戦を実行していく過程で村内の商工業者を対象に様々な調査をしました。その中で浮き彫りとなってきた課題が「従業員が足りない」「後継者がいない」というものだったんです。一方で、定住施策を展開する場面でも「家の紹介はできても、仕事の斡旋は難しい」という課題がありました。

そこで村長のリーダーシップによって、移住と就職をセットにし

た定住支援として協同組合を設立することになりました。定住希望者にはハローワークに登録してきましたが、きめ細かなマッチングが望めない。そういうところにまで村が踏み込んで斡旋や調整ができるのであれば、定住の大きなメリットになるのではと期待した部分もあります。企業7社でスタート。事業者に参画を促す公募を実施した結果、現在13社にまで拡大しています。

全国に先駆けて

総務省が人材派遣で労働力不足



同行する看護師



奥まった地域へ配達しているかわかみらいふの職員



業務の打ち合わせをしているお二人。写真左から 松井さん、三宅さん

を補うという制度を立ち上げ、その内容のプレゼンを事業者に実施しました。その時の反応は、「やっとこれで人材不足に歯止めがかかる」「行政が責任を持ってくれると安心して感がある」など、総じて歓迎ムードでした。ただ一方で、本当にできるのか?と疑心暗鬼な意見とか、全国初ということで前例がないけど大丈夫か?など心配をされる事業者もありました。最終的には事業者側のメリットとして「人材不足解消」が決め手になったと思います。

かわかみワークでは、1時間当たりの利用料金を950円で設定しています。村内での平均時給と同等額。でも、派遣労働者と組合は労使協定を結びますので、従事する業種によって賃金は変わります。事業者は950円以上の負担はしてくれませんが差額は赤字になります。赤字分は村と国からの補助金で補填して収支バランスを取っているのが実情。特に村からは制度のルール分以外の支援も受けています。事務局は現在3人で対応しています。事務局長は役場の職員が出向していますから、コストにはカウントされません。さらにこのうち1人は地域おこし協力隊員なので、実際に組合負担の職員は1人ということになります。

派遣労働者目線で支援

かわかみワークに登録されている派遣労働者は現在3人で、ひと月の基本給は時給900円をベースとして156,000円。ただ、先ほど言った労使協定で1時間1,000円の事業所へ派遣した場合は、その差額の100円を調整手当として支給しています。

かわかみワークの組合事業所は13社。需要に対して供給不足を指摘する声もありました。しかし、かわかみワークの本来の目的は定住です。移住者が地域で安心して長く暮らすことのできる環境を整えてあげるのが最も重要な仕事だと思っています。あまり乗り気しない職場に派遣しても結局長続きしない。事業所側からもクレームが入る。そのようなリスクを回避するために、事業所と派遣人材のマッチングを行い、仕事の内容や現場の下見を経て派遣する形です。

また派遣事業が始まった後も、受け入れ事業者と派遣労働者には頻りにヒアリングを行っています。先ほども言った通り、一番大切なことは長く川上村で暮らしてもらうこと。ですから、派遣者目線を徹底するという気持ちで支援を続けています。

持続可能な組合に育てる

かわかみワークでの1年間の取り組みを総括すると、当初は新し

い制度を導入して本当に大丈夫か?って思いました。発起人も初期段階の7人をよく集めたなと思います。この仕事の喜びは、派遣労働者を採用できたとき。その人たちが事業所で生き生きと仕事をしている姿を見ると苦労が吹き飛びます。また事業所からの感謝の声をいただくと、やってよかったと思います。

今後の課題は、派遣人材を継続的に確保していくということ。その中で事業所の皆さんの期待にも応えていかないといけないですし、経営的な安定というもあります。この事業がコストに見合っているかどうかということは意識してチェックしていく必要があります。補助金がなくなったときに自立でき、持続可能な組合の体制を育てておかないといけないですから。それでも、移住者目線という川上スタイルは、絶対に変えてはいけない部分。移住定住施策の中で仕事も紹介できるというのは大きなアドバンテージだと思います。 【文・永井晃】



「かわかみワーク理事会」 左から菊谷能樹さん(副理事長)、東谷孝則さん(理事長)、栗山忠昭さん(川上村長・監事)、上馬逸平さん(副理事長)



広島発 相馬藩主謹製スイーツ!

プリン 殿様布顛

1個 90g 480円(税別)



広島県神石高原町はこんなまち

広島県の東部に位置し、東は岡山県に隣接する面積381.98km²の町。中国山地が南に張り出した高原地形の中にあり、標高は400~500mとなっている。高地を利用した「神石高原プレミアムブランド」として「神石牛」や「トマト」などの生産、販売に力を注ぐ。その豊かな自然環境と温かな風土に魅せられ、東北の震災で被災した相馬さん一家も2013年に移住し酪農業を開始。新たな特産品開発に取り組んでいる。



購入先はこちら

ホームページ/相馬さんの牧場
<https://www.somasranch.com>
 お問い合わせ
somasranch@gmail.com

およそ洋菓子とは思えぬ筆文字と風格ある家紋入りのパッケージが異彩を放つ「殿様布顛」。その名の通り、殿様の完全手作りプリンとして話題の商品だ。

製造を手掛ける噂の殿は、現在の福島県を740年もの間統治していた旧相馬藩の34代目当主・相馬行胤さん。東日本大震災を経験し、被災した相馬地方のために貢献したいと、自らが生産する牛乳を使ったプリンの製品化に乗り出した。売り上げの一部は、故郷の伝統行事「相馬野馬追」の維持や馬事文化の継承活動などに寄付されている。

そんな思いのこもった殿様プリン。素材には、自家牧場で自然放牧により愛情たっぷり育てた牛から絞る生乳と、平飼い放牧鶏の有精卵を使用。生乳は、本来の

味を損なわないようノンホモゲナイズド(無均質化)・低温殺菌処理を行っている。添加物を使用せず、カaramelも入れず、浄めの意味を込めた塩をひと振りという至ってシンプルな製法からは、素材への絶対的な自信が窺える。

期待に胸を膨らませながら、「相馬藩主謹製」の封印を解く。柔らかすぎない適度な食感と、牛乳本来の優しい甘みの中にほんのり卵のコクを感じる、上品な味わいのプリン。クリーミーですっきりとしたおいしさながら、容器の小ぶりな見た目より満足感がある。オンライン限定販売だった商品は、この春から満を持して地元福島の道の駅3店舗でも販売を開始。ぜひ手に取って味わってほしい珠玉の銘菓だ。 【文・白波瀬聡美】

読者プレゼント

● アンケート

- Q1. 面白かった・関心を持った記事はなんですか?
- Q2. 今後取り上げてほしい内容はありますか?
- Q3. お住まいは水元の里(限界集落)ですか?
またそれに関わらず、地域で解決したい問題があれば教えてください。
- Q4. 水元の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

● プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、『水の源』編集委員会『水の源50号』読者プレゼント係までご応募ください。

【令和4年7月31日(日)消印有効】

殿様布顛 3名様



※当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
 ※ご応募いただいた方の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。

全国水源の里 フォトコンテスト

803点の応募

グランプリは「落葉のゆくえ」(安田敏彦さん)に決定

過疎・高齢化が進む現在の日本。当協議会は、要因となっている若者の地方離れや都市部への一極集中などの問題を共有し連携を図るため設立されました。

そしてこうした時代にあっても水源の里や故郷を守り、懐かしい風景や日本らしい趣・風俗を未来に託そうと企画されたのが、この「全国水源の里フォトコンテスト」です。

13回目となる今回も、新型コロナウイルス感染症のまん延防止対策をしていただくようお願いしながらの開催。それでも大きく応募数を減少させることなく開催できたことに感謝の言葉もありません。

今回からは、審査員に京都府立大学文学部特別専任教授の佐藤洋一郎氏と日本写真家協会会員の大久保勝利氏を招へいし、審査員長・田沼武能氏とあわせて3名が審査を行いました。

審査会場では、応募された803点の写真を審査員が厳正に選定しました。入賞した14点の作品をぜひご覧ください。



作品を選考する審査員

審査員

たぬまたけよし
田沼武能先生
(一般社団法人日本写真著作権協会会長)

佐藤洋一郎先生
(京都府立大学文学部特別専任教授)

大久保勝利先生
(日本写真家協会会員)



表紙写真



『落葉のゆくえ』

撮影地:北海道千歳市
安田敏彦さん
(北海道札幌市)

【講評・田沼】 水中の流れに舞う紅葉数葉を中心にカメラを外景に向け、青空・砂利などのカラフルな光景を斬新なアイデアで撮影した素敵な作品です。作者の感性が輝いています。



『祭りのクライマックス「水呑みの儀」』 撮影地:栃木県小山市
森田栄一さん (埼玉県川越市)

【講評・田沼】 小山市間々田で行われる蛇まつりは、約200年前から行われる雨乞いを願う行事です。ワラやタケ・フジヅルで作られた竜頭蛇体で、水を吞ませる姿は勇壮です。それを支える人々の真剣な表情は、水と人間・竜神の関係の強さを物語っています。近年は五穀豊穡を願うそうです。



『お手伝い』 撮影地:福岡県太宰府市

高群純一さん (福岡県福岡市)

【講評・田沼】 田植祭りは日本の各地で行われる行事。米を主食とする日本人にとっては大切な行事です。伝統的な衣装も華やかさを演出しています。右端でミノを着て孫に田植えを教える光景、それらが田んぼの水面に映える姿に、伝承行事の素晴らしさを表現しています。



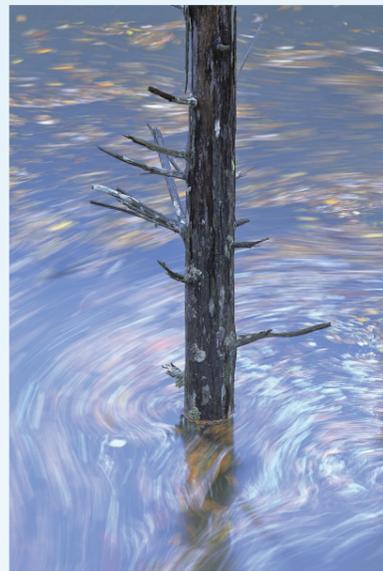
『銀河清湖に注ぐ』

撮影地:山梨県山中湖村
遠藤 公一 さん
(東京都小金井市)

【講評・田沼】 富士山の周囲には5つの湖があり、それぞれの湖面に美しい風景を演出しています。作者は夜空に輝く銀河を主役に、小さく浮かび上がる富士山の雄大な自然風景に日本の国の美しさ、清々しさを感じる作品です。



特選 『溪谷の夏』 撮影地:長野県須坂市
青木 彦忠 さん (長野県須坂市)



特選 『彩流紋』 撮影地:長野県王滝村
岡本 宗佳 さん (千葉県野田市)



特選 『福を求めて』 撮影地:京都府京都市
塩見 芳隆 さん (京都府京都市)



特選 『力合わせて棚田を守る』
撮影地:山梨県甲斐市
清水 進 さん (神奈川県海老名市)



特選 『夢の中で』 撮影地:大阪府岸和田市
村田 都紀子 さん (大阪府大阪市)



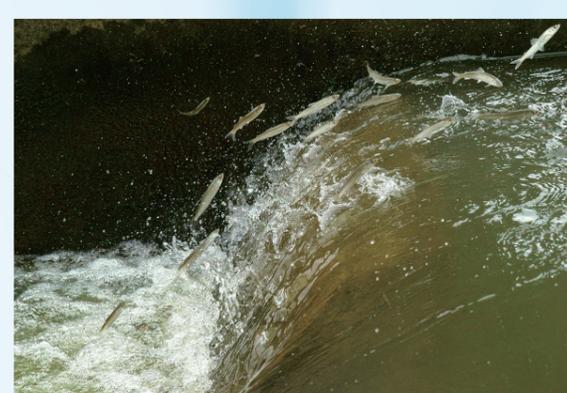
特選 『豪雪のお墓参り』 撮影地:秋田県東成瀬村
五十嵐 敏紀 さん (秋田県横手市)



特選 『滝行の夏休み』
撮影地:京都府綾部市
曾根 あゆ美 さん (京都府綾部市)



特選 『見守りの木』 撮影地:奈良県明日香村
西村 充康 さん (奈良県奈良市)



特選 『上流めざして』 撮影地:茨城県常陸大宮市
綿引 友子 さん (茨城県常陸大宮市)



特選 『さんしょううお つかまえたよ。』
撮影地:群馬県片品村
千葉 直江 さん (群馬県邑楽町)

田沼先生 コメント

今年はコロナ禍により例年より少々応募数は減りましたが、内容の素晴らしいたくさん作品が集まりました。いつも申し上げるように、個々の方々が自然から頂いた感動を表現した作品が上位に入賞しています。水は人間にはなくてはならぬものです。その水源を大切にするために、水と人間と自然の関係を表現した素晴らしい作品が選ばれました。

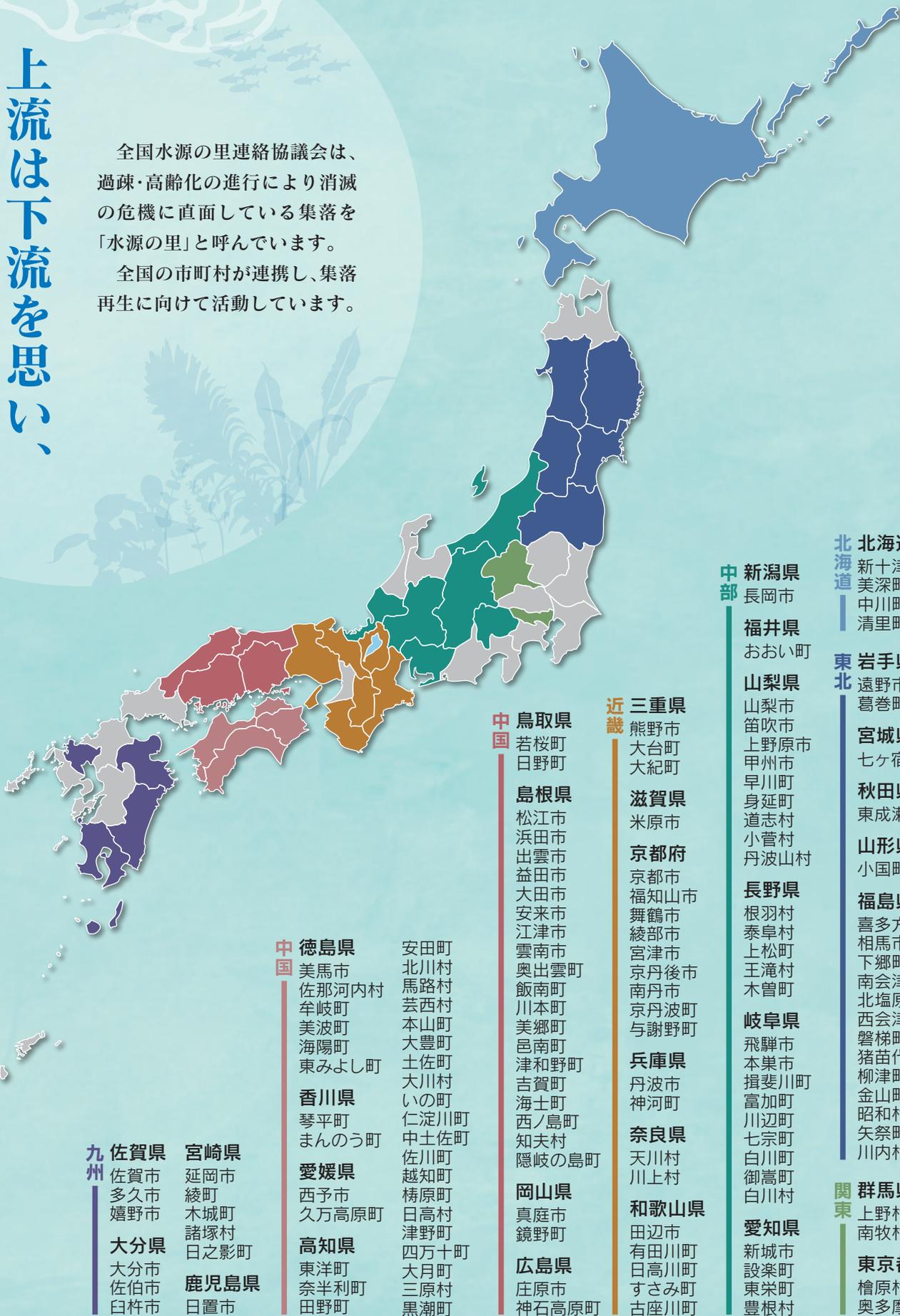
訃報

2022年6月1日、田沼武能先生が逝去されました。享年93歳。
フォトコンテスト開催当初から多大なご尽力をいただきました。
謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、
過疎・高齢化の進行により消滅
の危機に直面している集落を
「水源の里」と呼んでいます。

全国の市町村が連携し、集落
再生に向けて活動しています。



北海道
新十津川町
美深町
中川町
清里町

岩手県
遠野市
葛巻町

宮城県
七ヶ宿町

秋田県
東成瀬村

山形県
小国町

福島県
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

群馬県
上野村
南牧村

東京都
檜原村
奥多摩町

新潟県
長岡市

福井県
おおい町

山梨県
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

長野県
根羽村
泰阜村
上松町
王滝村
木曾町

岐阜県
飛騨市
本巣市
揖斐川町
富加町
川辺町
七宗町
白川町
御高町
白川村

愛知県
新城市
設楽町
東栄町
豊根村

三重県
熊野市
大台町
大紀町

滋賀県
米原市

京都府
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

兵庫県
丹波市
神戸町

奈良県
天川村
川上村

和歌山県
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

鳥取県
若桜町
日野町

島根県
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
知夫村
隠岐の島町

岡山県
真庭市
鏡野町

広島県
庄原市
神石高原町

徳島県
美馬市
佐那河内村
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

香川県
琴平町
まんのう町

愛媛県
西予市
久万高原町

高知県
東洋町
奈半利町
田野町

安田町
北川村
馬路村
芸西村
芸山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
梶原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

佐賀県
佐賀市
多久市
嬉野市

宮崎県
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町

大分県
大分市
佐伯市
臼杵市

鹿児島県
鹿屋市
日置市

私たちは水源の里を応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会

電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会